世の音のなきまひるまの軒かげに合歓の葉つばのなべて平らか　藤井征子（東京）

干し竿の白露ぬぐふ朝の日にけふ始めての客あきあかね　藤田幸子（山梨）

亡き後を思ひたりしか鎌を研ぐすべさへ夫は教へくれしが　藤本八重子（京都）

ふるさとの縁側一列足集ふさやぶんどうの筋取りをする　舟橋優香（茨城）

太腿に銃弾受けしままの叔父足曳きひたすら戦後を生きぬ　古市安紀子（千葉）

二百戸の家族構成知りつくす僧は廻りぬ村の盂蘭盆　保苅澄子（東京）

他人の名で吾を呼ばふ姉なれど別れの握手の指は話さず　保科きみ（千葉）

売上につながる電話と思へねどその音にさへ心和ぎたり　前田かつ子（東京）

禊行エイサエイサの声響く体と共に心も清める　前田慶之助（東京）

戦時下を共に過せし友逝きぬ焼かれし吾が家を語る人絶ゆ　牧野珠子（東京）

宇宙には中心のあり青葉には太陽のあり胎児が動く　松下弘美（兵庫）

秋空に山の稜線浮かびゐてはじけるやうな今日が始まる　松本明子（神奈川）

樹々の精に見まもらるるがの谷川に下りてしぶきを浴びる夏の日　松本淑子（北海道）

入学式、卒業式の式辞にはわが青春の暗さを言はず　摩尼久晴（新潟）

竜飛崎に吹く六月の寒き風野猿一匹海を見てゐる　水田暁美（千葉）

こんなにも小さな庭の世話にさへ泥みて水無月腰を伸ばしぬ　宮嶋千恵子（和歌山）

穂の垂るる稲田の上を縦横に銀と赤とのテープのゆれる　武笠啓子（千葉）

自己愛の強さ揶揄され水仙の蜜柑のかをり仄かただよふ　村上昭仁（愛知）

咳つづく妻をおもひて何かせむ茶碗をふたつ洗ふだけなり　村田清（神奈川）

八の字に茅の輪くぐりて産土に闘病の身を祓へてもらふ　村田泰代（東京）

甚六は期待の分だけ苦労する三男あたりはほったらかしね　村松建彦（静岡）

まだ高くは飛べぬ雲雀が啼いてゐる朝の日輪やさしき中に　森圭子（岐阜）

ヘルパーの資格ある娘の優しさに介護されつつ傘寿に近づく　森十三夫（栃木）

洗はれて夜風に心清まれば神を感じる代々木の森で　森響樹（東京）

古本の中より落ちたる押し花は薄れし愛に似て透きとほる　森屋俊一（東京）

初春の光を反す池の面小さき龍のひそみゐるべし　柳原操（千葉）

太陽を抱へるやうに初取りの大き西瓜を叔父運び来ぬ　山口明美（山梨）

戦地より母へ送りし父の文かたかなの字に優しさのあり　山崎修（富山）

筆圧の未だ強き頃したためし日記ひもとく知命を過ぎて　吉岡健児（愛媛）

記事乞食と嘲笑されても特ダネを狙ひし若き日の記者われは　吉岡泰男（静岡）

虚構なる父の死詠みて賞を得しわか者の才けふは淡む　吉澤保代（群馬）

幼子の一月居たる家の中まだそここに気配が残る　吉田美雅子（千葉）

かつて我が髪を切りくれしハサミにて散りみだしゆく母の銀髪　吉永明代（兵庫）

如何程の人見上げしや大銀杏ひこばえ残し生家絶えたり　米山芳郎（新潟）

ホタル舞ひ月夜に浮かぶ灯火に頬が染まりし君に恋する　若槻泰治（東京）

小二の児ら詠みし短歌を見せに来て娘は生き生きと教室語る　渡辺静子（北海道）

満月のこよひ涼しき風立てば月に向ひて内緒ばなしす　渡辺純子（愛知）

早朝の畑より戻る妻の手の若き胡瓜に金の棘あり　渡邉照夫（埼玉）

秋の陽に掲げ見るなりこんなにも透きとほる水を飲んでゐたのか　渡辺夏子（秋田）

その先の在るを信ぜし母ならむ「十年日記」の余白悲しも　渡邉信子（山梨）

秀逸作

はさみはねちょきちょきちょきとよく切れるスピード全かいもっと切ろうよ　小二　阿部珠美怜（東京）

さくらんぼ双子の子どもふとってく赤くなったらめしあがってね　小四　岩田葵衣（千葉）